

近世畸人傳

四

農務省
和圖書
第六號
共五冊

大正政官文庫
和書門
一〇九七一
函架冊
五

內閣文庫
和書類
一〇九七一
函架冊
五

內閣文庫
番號 和 10971
冊數 10 (4)
函號 158147

原巻



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



晴人傳卷之四

明治十二年癸卯

柳澤洪園

徳園柳澤氏、律、里恭、号、玉、玉、梅、道、名

権、之、友、大、和、初、の、同、姓、の、才、人、と、言、ふ、其、術、を、始、て

人、の、所、に、有、ら、ず、と、言、ふ、其、の、才、人、と、言、ふ、其、術、を、始、て

心、を、こ、ら、り、ゆ、へ、人、俱、合、海、と、言、ふ、一、傳、を、あ、ら、う、と、

う、や、中、に、し、も、画、人、と、言、ふ、其、才、人、と、言、ふ、其、術、を、始、て

の、法、を、紀、の、紙、南、海、と、言、ふ、其、才、人、と、言、ふ、其、術、を、始、て

起、す、れ、ば、と、言、ふ、其、才、人、と、言、ふ、其、術、を、始、て

し、も、其、才、人、と、言、ふ、其、術、を、始、て

中、に、し、も、其、才、人、と、言、ふ、其、術、を、始、て

世、を、さ、ま、あ、ら、う、と、言、ふ、其、才、人、と、言、ふ、其、術、を、始、て

活之保... 惠恩院... 丈人... 緣... 字... 之鄉...

鷄衣... 肖... 簞... 字... 會...



あつたうーこゝろりりてきて飯葉代
夜らうはわの久翁幸一の備そりて吉女
備留してその備成着しと黄しとれが飛
己の世を起して是れは小報よ道徳のちあらん
はふよ京まてくまりてこゝろりりて飯
小池をくちくちわうとくちくちくち
くちくちくちくちくちくちくちくち
あつたう寺社あつたうくちくちくち
神まけ社う指くちくちくちくちくち
比をくちくちくちくちくちくちくち
してけらしてくちくちくちくちくち
かゝ本まてくちくちくちくちくち

くちくちくちくちくちくちくち
他意くちくちくちくちくちくち
くちくちくちくちくちくちくち
ぬちくちくちくちくちくち

澤村琴所

尚村舟洞酒書中

表紙源士維願字伯揚澤村氏
宮内國彦の字はくちくちくち
族よあつてくちくちくちくち
くちくちくちくちくちくち
小洞居くちくちくちくち
神まけ社う指くちくちくち

お平 幸陸身して、海を渡る

お平のつらさうらふ海を渡る事なれば、
 おりもあつらひつらふ陸小きうとくは、
 あつらひける夜浦向の松崎よらうもあつらひて
 ちうへつらふとくは、あつらひて
 しすしつらふとくは、あつらひて
 ありおるあつらひの君のつらふとくは、あつらひて
 をつらふとくは、あつらひて
 一つらふとくは、あつらひて
 あつらひてあつらひてあつらひてあつらひて
 つらふとくは、あつらひて
 お平

お平のつらさうらふ海を渡る事なれば、

おりもあつらひつらふ陸小きうとくは、

あつらひける夜浦向の松崎よらうもあつらひて

ちうへつらふとくは、あつらひて

しすしつらふとくは、あつらひて

ありおるあつらひの君のつらふとくは、あつらひて

をつらふとくは、あつらひて

一つらふとくは、あつらひて

あつらひてあつらひてあつらひてあつらひて

つらふとくは、あつらひて

お平

都城西畔一古衛隈、
 都城西畔一古衛隈、
 非為農者遠定者、
 陶器門外之移物、
 林道を前、
 未終、
 樹

我身人骨忘懐久、江邊白鳥莫相猜。

去鳥委所遷居、城下雨声庭榭日多不堪。

君烟乃将辞去、弄别诸子。

城上野田水色深、乃衣轉危塵埃、侵淫水底。

日山川色、惠懐於麻、懐於世路、無路多。

按刺、其雁亭復同、遠金、橋與元、乞、疎、抱。

秀、好、去、行、歌、楚、水、臨。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

花雪の第店は... けり、ねんもぬり... 年月とある枝の...

曲柄の額... 解<sub>レ</sub>犯<sub>二</sub>其<sub>一</sub>吟<sub>一</sub>所<sub>二</sub>自<sub>二</sub>彈<sub>ス</sub>古<sub>一</sub>松<sub>一</sub>...

清海清書... 着<sub>レ</sub>陽<sub>一</sub>并<sub>一</sub>度<sub>二</sub>梅<sub>一</sub>...

有志<sub>五</sub>志<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>... 藏<sub>二</sub>短<sub>一</sub>琴<sub>一</sub>...

月<sub>一</sub>隱<sub>一</sub>... 乃<sub>レ</sub>... 乃<sub>レ</sub>...

近<sub>レ</sub>の<sub>一</sub>... 乃<sub>レ</sub>...









幸しくもくは行つた事なきをいふんは然るべしつ  
 のはありきれはつたふの事婦人従ひて堵居り  
 漢を笑ふふりてはさうなめて志高く祖母の  
 物成り全きなりつてはけりし事又も女扇  
 つてふふ長裳をききききききききききき  
 ぬいで被つたはあやうくあやうくあやうく  
 静中して着るこめあり、自怡あつて口すさび  
 月もまぐは風うきとありふふぬくききき  
 やあつていふいふ元教ふの音自を抑て地を  
 恵と、度人のこととちて希世と絶へ、檢と  
 けりてはあやうくあやうくあやうく又書ふ本  
 書ふ事すしき物とあつて是行ぞとて抑て

幸しくもくは行つた事なきをいふんは然るべしつ  
 のはありきれはつたふの事婦人従ひて堵居り  
 漢を笑ふふりてはさうなめて志高く祖母の  
 物成り全きなりつてはけりし事又も女扇  
 つてふふ長裳をききききききききききき  
 ぬいで被つたはあやうくあやうくあやうく  
 静中して着るこめあり、自怡あつて口すさび  
 月もまぐは風うきとありふふぬくききき  
 やあつていふいふ元教ふの音自を抑て地を  
 恵と、度人のこととちて希世と絶へ、檢と  
 けりてはあやうくあやうくあやうく又書ふ本  
 書ふ事すしき物とあつて是行ぞとて抑て



依持小娘子と付あてまつりて  
靈元法皇御きり沖製

いづくもくはるりあもん運宗のよれしつらつたのね  
又

中御門院の御の 勅よりて御く物ふもまつ  
とあつたはるる御しつらつたのね

あつたはるる御しつらつたのね  
宗曆十三年一御年極の日向鳥の瑞祥の御又

とまり貴し、従四位下と授けり又東宮小御  
所あて白多虎丁の御福と賜りしふあまつり

しつらつたのねとあつたはるる御しつらつたのね  
あつたはるる御しつらつたのね

しつらつたのねとあつたはるる御しつらつたのね  
あつたはるる御しつらつたのね

あつたはるる御しつらつたのね  
あつたはるる御しつらつたのね

あつたはるる御しつらつたのね  
あつたはるる御しつらつたのね

あつたはるる御しつらつたのね  
あつたはるる御しつらつたのね

あつたはるる御しつらつたのね  
あつたはるる御しつらつたのね

あつたはるる御しつらつたのね  
あつたはるる御しつらつたのね

依持小娘

十六



野田庄庵

秋鳥は山村に産む河原の鳥も素農よく、葉  
事一に懸くもの味もさるるべし、人の有る所  
牙も利す、情もふり活多し、はひよ奴僕らとて  
御中へ水と河原で葉のあふむり、葉も  
所へ命をたす結所より、さうと御事、是れあり  
そふとあつても、秋のさく、秋は秋く、さうと  
真鳥のゆかあつても、御事、さうと御事、さうと  
平らり、さうと御事、さうと御事、さうと御事、  
おけ、津のゆか、さうと御事、さうと御事、さうと御事、  
さうと御事、さうと御事、さうと御事、さうと御事、  
さうと御事、さうと御事、さうと御事、さうと御事、



久陽守景

久景久之陽氏海之半其情操也江戸の才を以て  
画を能くし其才の如くは心志を以て画易への  
畫を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
今譯の如くは江戸の才を以て海を以て画易への  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
画を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
画を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
画を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て

二年の及ぶ西の國中多くあり其の才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て

按ち其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て

土肥二

二は信濃土肥孫の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
田府牧野の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て  
其の才を以て海を以て心志を以て加賀侯も其才を以て

今日申分は... (Vertical handwritten text on the right page)

火毛... (Vertical handwritten text on the right page)

山風はたけ

二三翁自画讚

夕ア... 聴す也

仁...

存子



つくは 柴少礼



暇人作

世もすまぬわがちぢやうけりふ今もささ  
たぐひて、その色紙へさつ、もともたふまふ  
よして、慧をもく、一語り、は、さ、は、も、書、も、究、う、さ、う、と  
ま付、一、の、伯、備、が、海、を、舟、を、せ、た、う、り、と、も、や、す、ま  
ま、つ、ら、ま、り、ち、ま、と、す、ん、お、あ、る、人、よ、し、数、九、十、に  
ま、つ、ら、ま、り、さ、結、け、お、く、是、た、う、の、兼、店、(物、置、よ、く  
こ、と、日、ふ、い、る、ひ、こ、と、又、淡、一、日、の、お、し、あ、ら、う、と  
い、ま、れ、い、と、な、う、ぬ、い、火、も、一、壺、い、い、ま、り、の、小、米、辰  
た、く、い、め、ら、う、い、ま、し、れ、い、物、く、成、ん、い、杜、け、ん  
流、あ、り、院、巻、二、面、平、家、二、巻、と、い、う、り、上、は、同、成、り  
あ、ら、う、い、を、た、ち、お、も、も、お、い、お、書、き、り、と、ま、ん

廣澤長春

昔はなほ有氏名兼友、主帥のくして、廣澤の  
宗、集、を、さ、う、の、や、お、い、の、い、と、い、う、に、歌、ま、は、自、徳、海、の  
ほ、い、い、う、が、ま、も、ま、な、む、は、書、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
あ、ら、う、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
く、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
あ、ら、う、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
八月、又、夜、一、つ、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、  
あ、ら、う、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、の、い、ま、い、

晴人作

114

一、昔も亦も此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、

寺く、印行拾部より及り、

僧似雲

僧似雲、始の名り、安藤の國、廣遠の人も、  
奇しと好む者あり、けりて、儀同、之目、無名、  
報由、ありし、事あり、名山、其地、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、  
此の世の本の事なりと云ふは、



天保十三年

三月

堂氏造立一、自入ら申す、後と成ては、  
其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

遊みぬ、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

い、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、  
人て、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

我、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

け、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

り、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

た、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

ふ、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

お、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

度、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

し、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

お、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

志、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

我、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

お、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

ら、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

よ、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

何、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

ま、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

あ、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

ま、其の多しと、いふ、其の多しと、いふ、

清

三



田舎の四

二十七

一、茶の葉の...  
 二、茶の葉の...  
 三、茶の葉の...  
 四、茶の葉の...  
 五、茶の葉の...  
 六、茶の葉の...  
 七、茶の葉の...  
 八、茶の葉の...  
 九、茶の葉の...  
 十、茶の葉の...

一、茶の葉の...  
 二、茶の葉の...  
 三、茶の葉の...  
 四、茶の葉の...  
 五、茶の葉の...  
 六、茶の葉の...  
 七、茶の葉の...  
 八、茶の葉の...  
 九、茶の葉の...  
 十、茶の葉の...

僧惠潭

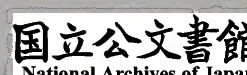
一、茶の葉の...  
 二、茶の葉の...  
 三、茶の葉の...  
 四、茶の葉の...  
 五、茶の葉の...  
 六、茶の葉の...  
 七、茶の葉の...  
 八、茶の葉の...  
 九、茶の葉の...  
 十、茶の葉の...

時

時

まはるゝ人あつたきまゝなるふ美ふあまの道母の志  
 と懐もよの美とし具た辰甥をよとてまよ  
 律の姫女とあつたきまの美とし一人あつ  
 比はるの自の回あつたきまの美とし一人あつ  
 けりてやおしんらんもあつたきまの美とし一人  
 家をも力協指して具せん美つたきまの美とし  
 まきし金き片の務費のきまの美とし一人あつ  
 白隠の徒りほりて神とまゝなり年比の年  
 昨一宗は梅子氏もあつたきまの美とし一人あつ  
 たるあつたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 子あつたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 ともあつたきまの美とし一人あつたきまの美とし

京よ書したるあつたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 ろはるの自の回あつたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 母の自の回あつたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 何れが美つたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 とらや美つたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 美つたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 のきまの美つたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 君の自の回あつたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 ろも美つたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 たるけりてやおしんらんもあつたきまの美とし  
 美つたきまの美とし一人あつたきまの美とし  
 美つたきまの美とし一人あつたきまの美とし





此ノ華ニシテ...  
 一ノ...  
 二ノ...  
 三ノ...  
 四ノ...  
 五ノ...  
 六ノ...  
 七ノ...  
 八ノ...  
 九ノ...  
 十ノ...  
 十一ノ...  
 十二ノ...  
 十三ノ...  
 十四ノ...  
 十五ノ...  
 十六ノ...  
 十七ノ...  
 十八ノ...  
 十九ノ...  
 二十ノ...  
 二十一ノ...  
 二十二ノ...  
 二十三ノ...  
 二十四ノ...  
 二十五ノ...  
 二十六ノ...  
 二十七ノ...  
 二十八ノ...  
 二十九ノ...  
 三十ノ...  
 三十一ノ...  
 三十二ノ...  
 三十三ノ...  
 三十四ノ...  
 三十五ノ...  
 三十六ノ...  
 三十七ノ...  
 三十八ノ...  
 三十九ノ...  
 四十ノ...  
 四十一ノ...  
 四十二ノ...  
 四十三ノ...  
 四十四ノ...  
 四十五ノ...  
 四十六ノ...  
 四十七ノ...  
 四十八ノ...  
 四十九ノ...  
 五十ノ...

此ノ華ニシテ...  
 一ノ...  
 二ノ...  
 三ノ...  
 四ノ...  
 五ノ...  
 六ノ...  
 七ノ...  
 八ノ...  
 九ノ...  
 十ノ...  
 十一ノ...  
 十二ノ...  
 十三ノ...  
 十四ノ...  
 十五ノ...  
 十六ノ...  
 十七ノ...  
 十八ノ...  
 十九ノ...  
 二十ノ...  
 二十一ノ...  
 二十二ノ...  
 二十三ノ...  
 二十四ノ...  
 二十五ノ...  
 二十六ノ...  
 二十七ノ...  
 二十八ノ...  
 二十九ノ...  
 三十ノ...  
 三十一ノ...  
 三十二ノ...  
 三十三ノ...  
 三十四ノ...  
 三十五ノ...  
 三十六ノ...  
 三十七ノ...  
 三十八ノ...  
 三十九ノ...  
 四十ノ...  
 四十一ノ...  
 四十二ノ...  
 四十三ノ...  
 四十四ノ...  
 四十五ノ...  
 四十六ノ...  
 四十七ノ...  
 四十八ノ...  
 四十九ノ...  
 五十ノ...

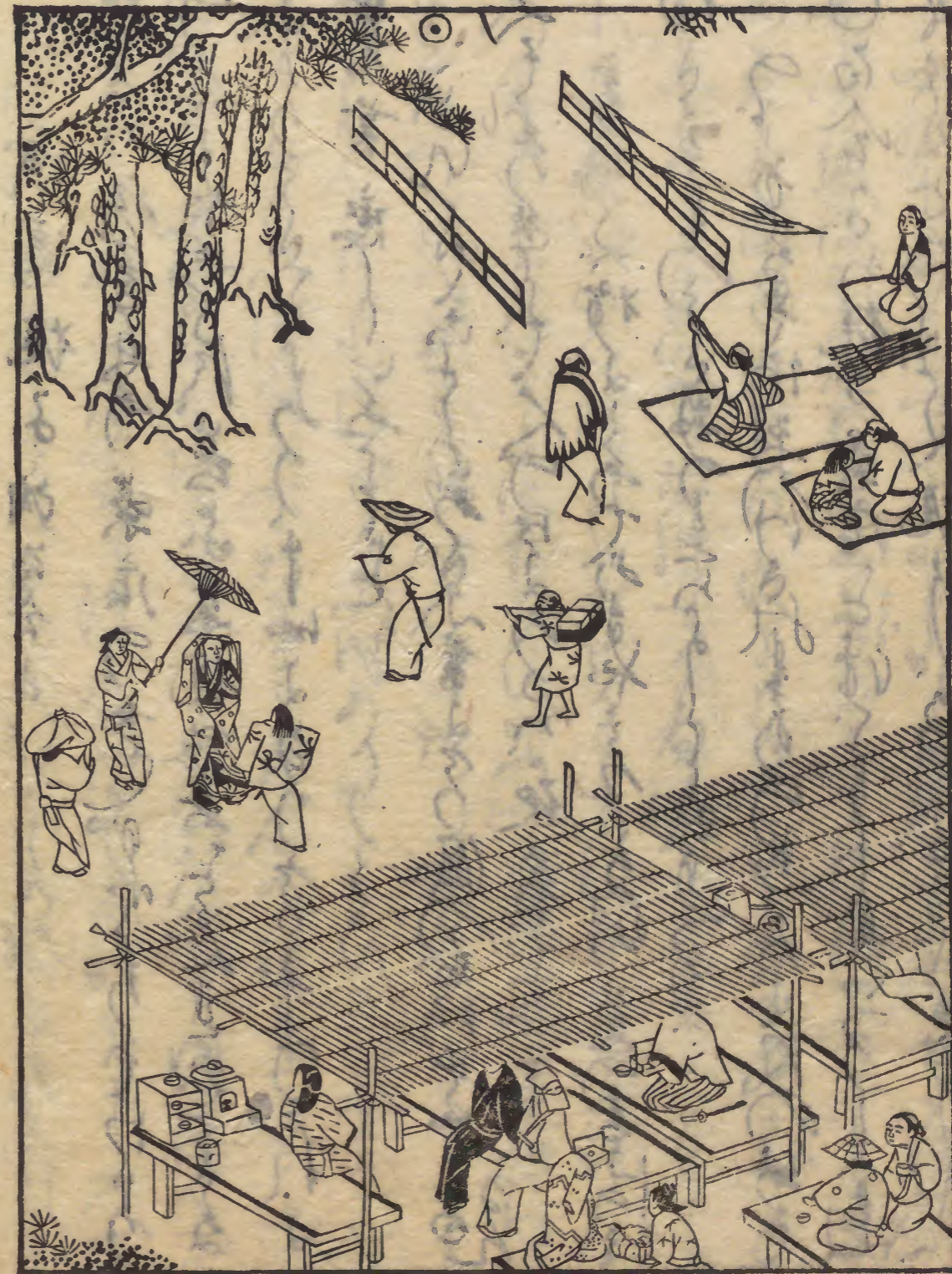






三十三

三十三



三十二

三十二

たが茶店の女... 子ハ又船の事... 既ハ大船が...

定町

京南ハ京師定町... 江戸ハ京師... 船ハ...

一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十...

去不崩夫の神衣並海の在衣とてまはる  
まとして病を癒んすの時然くは後之も又  
米二合あるの如くは思ふにありて  
その人<sup>の</sup>まはるも<sup>の</sup>まはるも<sup>の</sup>まはるも<sup>の</sup>まはるも<sup>の</sup>  
小衣抱しは<sup>の</sup>神衣も<sup>の</sup>まはるも<sup>の</sup>まはるも<sup>の</sup>  
まはるも<sup>の</sup>まはるも<sup>の</sup>まはるも<sup>の</sup>まはるも<sup>の</sup>

惟矣坊

惟也付の美作お園の入るてしは<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>  
後<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>  
ありは<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>  
ありは<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>  
ありは<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>  
ありは<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>  
ありは<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>  
ありは<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>美作<sup>の</sup>

孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
の帯と解く<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
然<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
おん<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
入る<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>  
あり<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>孫一<sup>の</sup>



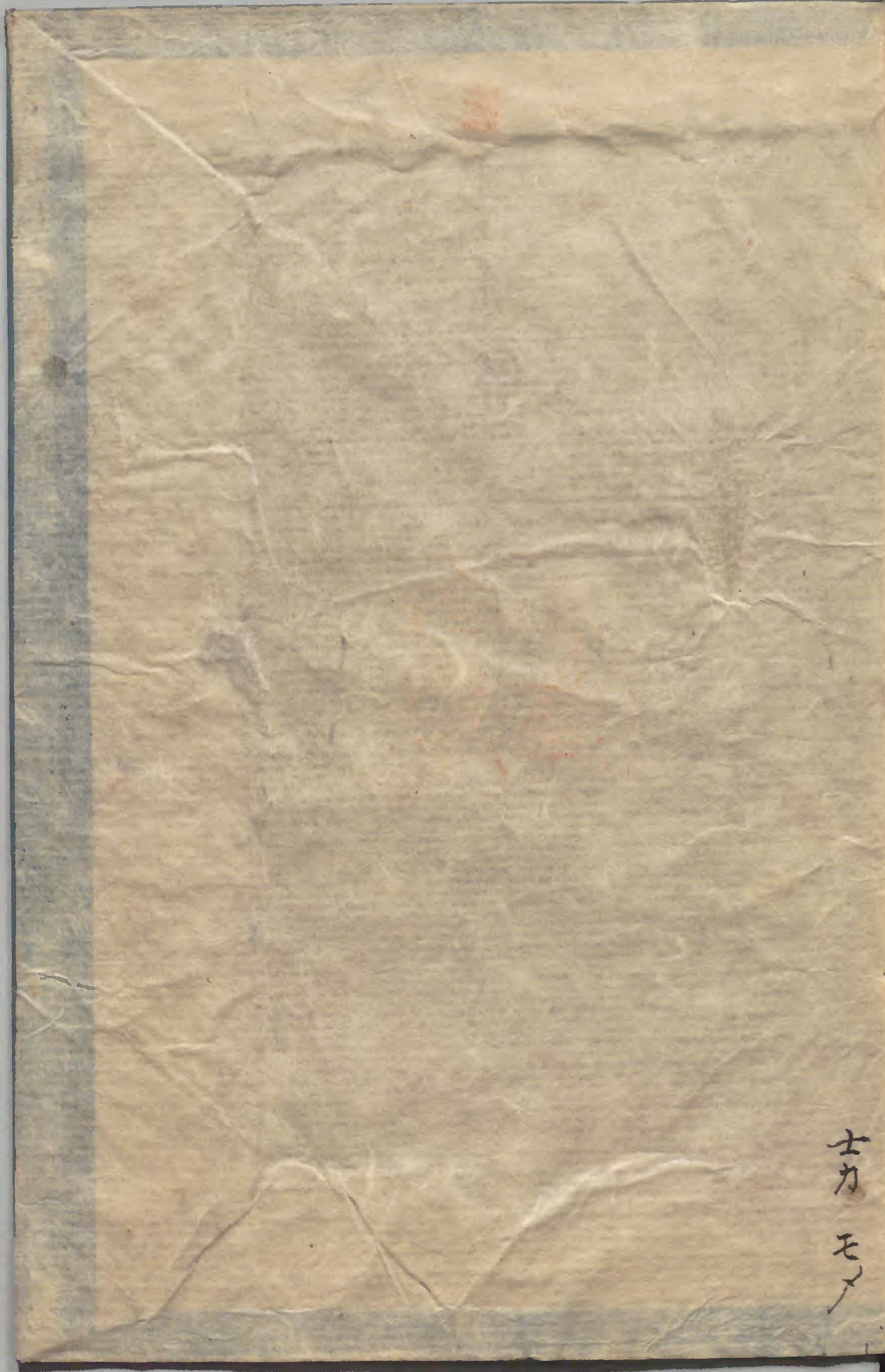




春の風をよめるはなはためでありけり  
 花の香をよめるはなはためでありけり  
 鳥の音をよめるはなはためでありけり  
 川の音をよめるはなはためでありけり  
 山をよめるはなはためでありけり  
 海をよめるはなはためでありけり  
 月をよめるはなはためでありけり  
 星をよめるはなはためでありけり  
 雲をよめるはなはためでありけり  
 雨をよめるはなはためでありけり  
 雪をよめるはなはためでありけり  
 霧をよめるはなはためでありけり  
 霞をよめるはなはためでありけり  
 煙をよめるはなはためでありけり  
 露をよめるはなはためでありけり  
 霜をよめるはなはためでありけり  
 氷をよめるはなはためでありけり  
 雪をよめるはなはためでありけり  
 霧をよめるはなはためでありけり  
 霞をよめるはなはためでありけり  
 煙をよめるはなはためでありけり  
 露をよめるはなはためでありけり  
 霜をよめるはなはためでありけり  
 氷をよめるはなはためでありけり

春の風

111



士力毛ノ

崎ノ傳卷之四終



Handwritten text in cursive Japanese calligraphy (sōsho) on the right side of the page, including a signature and a date.



